

---

# 不思議なりんご

二年はニート

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不思議なりんご

### 【コード】

N6057G

### 【作者名】

二年はニート

### 【あらすじ】

ある少女が食べてはいけないというりんごを食べてしまいました。  
・  
・  
・そしてその話は広まり・・・

ある国のある村にいつまでも熟さない不思議なりんごがありました。

誰が言ったか分かりませんが。

「そのりんごを食べると大変なことになる。誰も近づいてはいけ  
ない」

そんな言い伝えがありました。

そのりんごは見た目もまずそうですし、青いままです。とてもじゃ  
ないですが。食べる気にはなりません。

しかしいつの日かりんごを食べやろうと毎日毎日隙をみてはりんご  
を食べようとす少女がいました。

少女はみんなが食べないものを食べてやりたいと思っていました。

「あんなにいけないといわれると余計に食べたくなる」

「本当はおいしんじゃないだろうか？」

勝手な想像を働かせいつも狙っていました。

ある晩、村で家事が起こりました。

大人はみな火を消すために家から出て行ってしまいました。

少女はしめたと思いました。

そして少女はりんごを食べることに成功したのです。

りんごはおいしくはありませんでした。まずくもなかったのですが。なので少女は半分食べて捨てようと思いました。

そしてりんごを見ると残りのりんごは腐ってもう食べれなくなっていました。少女は気味悪がって腐ったりんごを捨ててしまいました。

そして次の日少女はやることもなくぼーっとしていました。しかしあのおいしいともまずいとも言えないりんごの味が忘れられませんか。

少女はまたりんごを食べたくなってしまうました。

そしてその欲求をもう抑えることができなくなってきました。

なので少女は「また火事が起これば・・・そうすれば食べられる」

そう思いました。

少女は自分の家から少し離れた所に火を放ちました。

大人たちはまた火を消しにいき。少女はりんごを食べることができました。

「やっぱり前と同じでおいしくない」

「まずくはないけど」

なので今度は三分の一だけ食べました。そうするとまた不思議な事に残りは腐って食べれなくなっていました。

気味が悪かったので少女はまたすぐに残りのりんごを捨てました。

少女は火をつけたことを後悔しました。毎日罪の意識にさいなまれていました。

しかしりんごの味が忘れられず。隠れて食べるにいつていました。

「自分はこのりんごを食べてから頭がおかしくなってしまったのだろうか？」

「あの日から私はどうかなくなってしまったのだろうか」

少女はそれを友達の男の子に話してみました。

友達はじめは馬鹿にしたように話を聞いていましたが、少女の真剣な態度に次第に興味を持ち始めてきました。

「味はいまいちだが、何度も食べたくなるりんごか、なかなか面白そうだな」

「今夜にでも家を抜け出して食いに行ってみるか」

少年は夜のみんなが寝静まった時間にこっそりと家を抜け出し、りんごの木に登りりんごを食べてみました。

少女の言ったとおりでした、りんごはおいしくないし、しかしまずくもない。なんとも言えない味でした。

「なんだこりゃあ、やっぱり食わんでも良かったじゃないか。こんなもんいらねーや」

そういつてりんごを半分残しました。そして残りは腐っていたので気味悪がって少年は遠くに残りを投げました。

次の日少年遊びに行く気もおきず、じっとしていることもできませんでした。

りんごの事が頭から離れなかったのです。

そして夜またこっそり抜け出してりんごを食べに行きました。

しかしりんごはやっぱりおいしくありません。少年は少女と同じで三分の1だけ食べて後は腐ったので捨ててしまいました。

少年は少女の言っていたことが分かり、怖くなってきました。なので友達を全員集めてこの話をしてみました。

友達達ははじめはみんな少年と少女の話を馬鹿にしていました。

しかし二人の真剣な態度に次第に好奇心を持ち、食べてみようと思いはじめました。

そして全員が全員、半分食べて捨て、そして次に食べるときは三分の1で捨てて。

それでもりんごを食べたくなってしまうのでした。

この話はいつしか村中に広がりました。

大人たちも人目を盗み、りんごを食べてやろうと夜中に抜け出した  
り。

騒ぎを起こしたり。

隠れてこっそり食べていました。

そして大人たちもみな半分食べて残りはすて、次は三分の一だけ食  
べ残りは捨ててしまいました。

みんながそのりんごを食べはじめたのでりんごの数はどんどん減っ  
ていきました。

いつしかそのりんごを手に入れるため人々は争うようになっていき  
ました。

はじめに女の子達がしんでいきました。

次に男の子が死んでいきました。

そして大人の女性が死に。

屈強な男達が残りました。

しかしりんごを食べられる量はどんどん減っていきます。

はじめは半分。次は三分の一。次は四分の一。次は五分の一と・・・しかし食べずにはられないのです。そして食べれば食べるほどすくりにんごを食べたくなってしまう。

そうして屈強そうな男達も殺しあいをはじめ一番強い男一人を残した後、村人は全員死んでしまいました。

男は一人でりんごを食べているうちにはっとわれに返りました。

「自分は何をしているんだろう・・・なぜこんなもののために」

男は考えれば考えるほど罪悪感に蝕まれ、わけが分からなくなり。

ストレスで髪は抜け落ち、食べ物はのどを通らず。

何もすることもできずりんごの木の前で座っていました。

そして耐えれなくなった男はこのりんご食うべからずという立て札を立てて崖から飛び降りて自殺してしまいました。

そして何年かしてりんごが実り、その村に人が戻ってきました。そして村人達は誰もいない村を気味悪がりました。

そしてりんごの木の立て札をたいそう気味悪がりました。

人々はそのには誰も近づかせず、子供や孫には「あそこには危ないから行ってはいけないよ」



と伝えたいそうです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6057g/>

---

不思議なりんご

2010年10月14日15時41分発行